

西国肥前にも咲いた元禄文化

— 儒学に夢をかけた多久茂文 —

JR多久駅から南約四キロの多久町東の原に、国の史跡「多久聖廟」があります。その本堂天井には、みごとな竜の絵が描かれています。言い伝えによると、竜の動きを止めるために鱗を一枚だけ取り除いてあるそうです。すごい竜ですね。一体、いつごろ、だれによって、この竜は描かれたのでしょうか。その鍵は、多久四代邑主多久茂文と大きな関わりがあるようです。

ちょうど、この竜が描かれたころ、京都や大阪などの上方では、元禄文化と呼ばれる、これまでになかった庶民の新しい文化が栄えていました。

井原西鶴、近松門左衛門、松尾芭蕉、尾形光琳などは、このころ活躍した人でした。学問も公家や僧侶から武士や庶民の間に広まり、儒学が学問の中心になったのもこのころからです。

なかでも、五代将軍綱吉は、一六九〇年（元禄三）、江戸の湯島に孔子を祀る聖堂を建てて、儒学を奨励しました。そして、儒学の理想を政治に生かすため、自ら幕府の家臣を集めて、しばしば、儒学の講義をするほどでした。

そのころ、私たちの郷土でも、儒学に志あつく、その理想の現実に意欲を燃やしていた人たちがいまし



聖廟天井画・蟠竜
(多久市多久町東の原)

た。茂文もその一人です。

一七〇五年（宝永二）、茂文は、將軍綱吉と同様に、儒学の祖・孔子を祀る聖廟の造営にとりかかっています。その手続きについて、江戸時代に書かれた「丹邱邑誌」には、次のようなことが書いてあります。

「……聖廟・学校を建てようと本藩へ申し出たが、本藩も独断では許可できず、幕府へ申し出た。幕府は、まず湯島に聖堂を建てた後、許可をした。そこで本藩も鬼丸に聖堂・学校を建て、多久邑も造営したと言われる。そこで、わが国で、聖廟・学校の中興は、わが多久茂文公である。その志大なり……」と。

真相は明らかではありませんが、幕府・本藩・多久邑の順に建てられたということは、当時の武家社会の一面が窺えるようですね。

わずか八千石の多久邑にとって聖廟の創建は、経済的にも、建築技術の面でも、大変なことだったと思われまます。なにしろ、手本のない聖廟創建でした。設計監督には、佐賀城下の儒学者武富成亮が当たり、大工左官、その他の労役は多久邑の人たちが当たったそうです。天井の竜の絵は、多久邑の絵師・御厨夏園が精魂を込めて描きました。また、建築資材の木材なども多久邑全域二十六の場所から集められるなど、多久邑民総力を挙げての大事業だったようです。



多久茂文肖像画
(多久市郷土資料館蔵)

聖廟正面梁の彫刻
(多久市多久町東の原)





聖がんと孔子像
(多久聖廟蔵)

多久聖廟は、着工から三年後に完成しました。幕府の湯島の聖堂完成に遅れること十数年ですが、当時の姿をそのまま残す日本最古の聖廟です。

しかも、完成以来、毎年一度もかかすことなく孔子をたたえる儀式「釈菜」が今日まで続けられています。

では、茂文が、儒学の理想を実現するためのもう一つ、学校づくりの方はどうなっていたでしょうか。

学校と聖廟の建設を熱望していた茂文は、さっそく、学校の建設に取り組みました。

一六九九年(元禄一二)、待望の学校が完成し、学問所(後の「東原庠舎」)、またの名を「鶴山書院」とも言いました。初代教授に儒学者・河浪自安が任せられました。

全国的に藩校や邑校の設立時期をみると、邑校・東原庠舎は、きわめて早い時期にあたります。しかも、学校として独立した校舎をもち、百七十年間、儒学を中心にした文武両道の教育がなされてきました。

藩校や邑校では、一般に武士の子弟の教育を中心にしていました。後の東原庠舎では、家臣の子弟は、八歳で入学して二十五歳で卒業するようになっていました。また、二十五歳

藩校・聖堂の設立年代
(「佐賀県歴史資料集(光文館)」より)

1688	川久保領・知方館
1691	佐賀本藩・二の丸聖堂
1694	武富威亮・大財聖堂
1699	多久領・東原庠舎
1700	佐賀本藩・二の丸聖堂を鬼丸に移す
1708	多久領・多久聖廟恭安殿
1716	武雄領・身教館
1735	須古領・三近堂
1723	唐津藩・盈科堂
1773	蓮池支藩・蓮池学寮のち改名
1776	〃・塩田学寮観瀾亭
1781	佐賀本藩・弘道館
1784	蓮池支藩・成章館(改名)
1787	小城支藩・興讓館
1788	久保田領・思齊館
1801	唐津藩・経誼館
1805	鹿島支藩・徳讓館
1817~	唐津藩・志道館
1859	鹿島支藩・弘文館(改名)
1870	〃・鎔造館(改名)
不明	巖原藩・東明館(田代)

までに文武の一つを修得できなかつたら家の跡継ぎはできないなど（一八四八年から一八五九年までの規則）、ずいぶん厳しい面もあったようです。

次の文の意味がわかりますか。

「百姓町人と雖も、志次第、師範へ申し達し、学舎道場へ相勤むべき事」

ずいぶんむずかしそうですが、杵島郡白石町にあった須古邑の邑校「三近堂」

にも、これと同じような内容のきまりがありました。武士の子弟だけでなく、農民や町人など勉学を志す人は、入学できるようになっていました。当時の藩校・邑校としては、すばらしい制度ですね。

邑内のできるだけ多くの人が勉学しやすいように、三ヶ所に分校を作った時期もありました。幕末には、東原庫舎の生徒数は、寄宿生百五十名、通学生百二十名と記録されています。

元禄の世に生きた茂文の孔子への尊敬の念と儒学への熱い思い、それを支えた郷土の先人たちの願いが導火線となって、後に、「多久の雀は論語をさえずる」（雀も忠？忠？と鳴く）、「多久の百姓は鋤を置いて道を説く」などのことばを生んだようです。

そして今も、春秋二回の「釈菜」が創建当時の中国式のやり方をそのまま受け継ぎ、伶人の奏でる音楽のなか「排班—迎神—鞠躬—拝—興—拝—興—平身」などの合図で儀式がすすめられます。国際交流の世の中で、貴重な歴史の遺産ともなっているようです。



現在の東原庫舎
(多久市多久町東の原)

多久聖廟の釈菜
毎年4月18日と10月第3日曜日に開催される

